

「ワールド・オブ・ライズ」★★★★

2008（平成20）年12月28日鑑賞
梅田ピカデリー>

監督・製作：リドリー・スコット
 ロジャー・フェリス（CIA 職員）／レオナルド・ディカプリオ
 エド・ホフマン（CIA 中近東局主任）／ラッセル・クロウ
 ハニ・サラーム（ヨルダンの総合情報総局局長）／マーク・ストロング
 アイシャ（看護師）／ゴルシフテ・ファラハニ
 パッサム（イラクのフェリスの助手兼運転手）／オスカー・アイザック
 ガーランド（一匹狼のCIA 局員）／サイモン・マクパーニー
 アル・サリーム（爆破組織のリーダー）／アロン・アブトゥール
 オマール・サディキ（ヨルダンの建築家）／アリ・スリマン
 マルワン（ハニ・サラームの警護官）／ジャミルコーリー
 スキップ（ヨルダンのフェリスの助手兼運転手）／ヴィンス・コロシモ

2008年・アメリカ映画・128分

配給／ワーナー・ブラザーズ映画

<これは必見！しかし・・・>

レオナルド・ディカプリオとラッセル・クロウの共演。しかも監督がリドリー・スコット。それだけでこれは必見！しかし、公開9日目とはいえ、日曜日午後4時10分からの梅田ピカデリー10階の観客席はガラガラ。こりゃ一体ナゼ？それは多分CIA、中東、爆破テロという本作のテーマが、平和な国ニッポンの国民が求める娯楽のニーズにフィットしないため・・・？だって12月26日の新聞各紙にはソマリア沖に出没する海賊を退治するため中国海軍が軍艦三隻を出撃させることが報道されたが、今や日本だけがこれに対して何の対応もしていないことに何の危機意識もないのだから。平和であることはありがたいことだが、それは不断の努力のたまものであることを日本人はもっと考えなくてはならないのでは？そして、そう考えれば、少なくともアメリカにはCIAという情報組織があり、自爆テロを含む世界的規模のテロと日夜戦っているという現実くらいは直視しなければならないし、そのための絶好の教材となるこんな映画に興味を持たなければ・・・。同じ日に梅田ピカデリーでは『特命係長 只野仁』（08年）を上映しているが、もしこちらの観客席はいっぱいということであれば、そんなニッポン国の行方は絶望的・・・？

<妥当な出演料対比は、8対2？7対3？>

レオナルド・ディカプリオもラッセル・クロウもハリウッドを代表するビッグネームだが、当然ラッセル・クロウの方が先輩だから、1人で主役を張った場合の出演料対比は同レベルか少しラッセル・クロウの方が上くらい？すると二枚看板で出演した場合、両者の出演料は5対5で同じ・・・？

一般論としてはそれでいいのだろうが、この映画に限ってはそれは不平等。なぜならこの映画におけるレオナルド・ディカプリオ演ずるCIA 職員ロジャー・フェリスの世界を股にかけた危険な現場での働きぶり、ラッセル・クロウ演ずるCIA 中近東局主任エド・ホフマンの安全な場所からケータイで指示を下すだけの働きぶりには、やはり報酬面で大きな差をつけるべきだと思うから。そう考えると、私の「査定」では8対2・・・？もしくは7対3・・・？

<いつか似たような映画を・・・>

この映画のパンフレットには映画文筆家の吉田広明氏の「視線と接触」という面白いコラムがある。その論旨はフェリスは接触性の男であるのに対し、ホフマンは視線（遠隔性）の男だということ。そして吉田氏と同じように私がこの映画を観ながら思い出していたのが、ブラッド・ピットとロバート・レッドフォードがCIAの教官と教え子という役割で出演した『スパイ・ゲーム』（01年）（『シネマルーム1』23頁参照）。

私は全然知らなかったが、『スパイ・ゲーム』の監督トニー・スコットは、リドリー・スコット監督の弟だと聞いてビックリ。別に兄弟で相談してつくったわけではないだろうが、この2つの映画の構想と配役の妙は全く同じ。もっとも映画のテーマやテイストは全然違っているから、どちらを気に入るかはあなたのお好み次第だが・・・。

<能力の他、2人の人格比較を>

ヒラリー・クリントンの國務長官への就任をはじめとしてオバマ新政権の主要スタッフは異例の早さで決定したが、12月27日付読売新聞はCIA 長官だけがなかなか決定しないことを報道した。細かいことはわからないが、要するにCIA の中にも派閥があり（？）、「あちらを立てれば、こちらが立たず」状態となるため、オバマ新大統領も悩んでいるというわけだ。

直前にそんな「情報」を得ていただけに、映画の冒頭に描かれる、ホフマンがCIA 中近東局主任として辣腕を振るい始める姿には半分幻滅し、半分納得。つまりCIA も官僚組織であり、内部での出世競争が大変だということだ。もちろん、ホフマンのCIA 幹部としての能力は一流なのだろうが、その人格は？ホフマンの役が、職場の中や家庭から携帯電話を通じて指示を出すだけという設定にされていることもあって、ホフマンを演ずるラッセル・クロウはその役にかなり目立つ特徴を与えているのでそれに注目。すなわちそれは、少しユーモラスな面もあるが、かなり嫌味なキャラクターでもあるので、その実態はあなた自身の目で。

これに対し、アラビア語を自由に操る他、常に危険な現場で冷静沈着な判断を下すフェリスのCIA 職員としての優秀さは折り紙付きだが、面白いのは彼の人間性。邦題が『ワールド・オブ・ライズ』（原題が『BODY OF LIES』）とされているように、この映画のキーワードは「L I E S」、つまり嘘。外交官にとってはもとより、スパイや職員にとって虚々実々の駆け引きが不可欠だから、嘘をつくのは常套手段。もちろん、それはフェリスだって同じだが、意外にもフェリスは正直というか、一途というか、純情というか、そんなタイプ。したがって、フェリスは直接の上司であるホフマンから何度も嘘をつかれるのだが、それに対してムキになって抗議している姿を見ると、まるで大人と子供・・・？この映画では、2人の持つ能力の他、そんな2人の人間性についても比較してみよう。

<第3の主役は？>

この映画の表看板はレオナルド・ディカプリオとラッセル・クロウだが、実は第3の主役がいる。それがヨルダン総合情報総局（G I D）の局長ハニ・サラーム（マーク・ストロング）。彼はヨルダン王国からの信頼も厚いうえ、彼の言葉によれば「国王を除けば最も権力のある男」らしい。もちろん、フェリスはそんなハニの能力を高く評価しているが、同時にフェリスは俺は全世界に責任を持っているのに対し、ハニはヨルダンだけ、とどこか見下している感も。したがって、世界中で無差別爆弾テロを目指すアル・サリーム派の首謀者アル・サリーム（アロン・アブトゥール）の逮捕が共通の目標であっても、ホフマンはハニと情報を共有することを断固拒否するし、利用できる部分だけ利用しようとするから、両者が協調しないのは当然だ。

これに対し、意外に相手の人間性を信頼してしまうタイプのフェリスは、ホフマンの指示によってハニと協力してアル・サリーム逮捕作戦を実行するについて、自分の持つ情報を提供することに躊躇しなかったから、ハニの信頼を勝ち取ることにも。もっとも、ここでハニからクギを刺されたのは、「絶対に嘘をつくな」ということ。もちろん、フェリスはそれに対してうなずき、以降さまざまな作戦を共同で実行したが・・・。

レオナルド・ディカプリオやラッセル・クロウのビッグネームに比べるとまだまだだが、『リボルバー』（05年）、『オリバー・ツイスト』（05年）、『シリアナ』（06年）、『サンシャイン2057』（07年）等に出演しているイギリス人俳優マーク・ストロングが、えらくカッコいい紳士的な雰囲気、第3の主役ともいべき役割を。

<この程度のラブストーリーなら・・・>

邦題を『ワールド・オブ・ライズ』としたのは、CIA 職員としてフェリスが飛び回る国や地域が①イラクのサマラ、②イギリスのシェフィールド、③ヨルダンのアンマン、④オランダのアムステルダム、⑤アラブ首長国連邦のドバイ、⑥トルコのアダナ県インシルリク等々に及ぶため。そのぶん話は面白いが、舞台の展開が複雑かつスピーディーになるため、観客はストーリー展開についていくのが大変。もちろん、そのすべての地域で命がけの活動を展開するフェリスは観客以上に大変だ。

リドリー・スコット監督はそんなフェリスに気を遣ったためか、ヨルダンのアンマンでの騒動で犬に噛まれて病院を訪れたフェリスと、フェリスに狂犬病の予防注射をする看護師アイシャ（ゴルシフテ・ファラハニ）との間にラブストーリーを用意した。たしかに、毎日ギリギリの局面で命をすり減らして情報収集活動に従事しているフェリスにとって、アイシャが心の安らぎになったことはまちがいないだろうが、世界各地を分刻みで飛び回るCIA 職員にゆっくりデートを楽しんだり、愛を育む時間的余裕なんてホントにあるの？しかも、自分の行動がすべてCIA 本部から見張られている（見守られている）だけではなく、敵側からも監視されている可能性が高い中、そうそう自由に女性とのデートを楽しむ余裕などないはずだ。しかも、父親はイラン人だというアイシャにとっても、政治コンサルタントと称するアメリカ人フェリスとつき合うことは、世間の反発はもちろん、危険すら内包していることは容易に予想できるのでは？

もちろん、フェリスは男だから性的欲求の処理は必要かもしれないが、そこは『007』シリーズのジェームズ・ボンドのように（？）、適当に処理すればいいのでは？もっとも、昔のジェームズ・ボンドと異なり、21作目の『007/カジノ・ロワイヤル』と22作目の『007/慰めの報酬』のジェームズ・ボンドは本命女性への純愛を貫いているが・・・。男が仕事をするうえで女の存在が励みになることはあるが、逆に女の存在が負担になったり、敵に利用されたりすることもよくあること。そして実は、この映画においてもモロにそんな影響が。1月17日に公開される『感染列島』（08年）では3つものラブストーリーが含まれていることを批判したが、本作ではフェリスとアイシャのラブストーリー程度はちょうどいい加減・・・？

<あっと驚く新戦とは？その展開は？>

映画前半はアル・サリーム逮捕に向けたフェリスの努力もホフマンの努力もすべて空回り、世界各地で爆破事件が続発。さらにフェリスとハニが組んだ活動も、結果的にホフマンが邪魔をしたため、仲間内のケンカを生み出しただけ。そんな中フェリスが立案しホフマンが応援した作戦は、アル・サリーム派とは別の爆破テロ組織をデッチあげ、嘘の爆破事件をニュースで流すことによって、アル・サリームが動くのを誘い出すという大胆なものだった。そんな作戦遂行のためフェリスに協力するのは、CIA のはぐれ作員のガーランド（サイモン・マクパーニー）。彼にとっては自宅兼職場にあるパソコンがすべての武器。『DEATH NOTE』（06年）のライトのように最近はこのキャラクターが多いが、引きこもりタイプのパソコンおたくでも、作戦内容によっては大きな役割を果たすことができるのだ。他方、爆破組織「めざめの兄弟」のリーダーにデッチあげられたのは、ヨルダン人の建築家オマール・サディキ（アリ・スリマン）。ガーランドのパソコン検索による人選によって、敬虔なイスラム教徒であるサディキが最適とされたわけだが、そりゃサディキにとっては迷惑千万な話。建築の依頼主になりすましたフェリスはアラブ首長国連邦のドバイでサディキに会い、仕事の話にかこつけてガーランドと共にさまざまな工作を実行。そのうえで、トルコのインシルリクにあるアメリカ軍基地での爆破事件をデッチあげ、「めざめの兄弟」によるアラビア語の犯行声明が全世界に流れたから、そのリーダーたるガーランドのパソコンにはイスラム過激派から称賛のメールがどっさりと・・・。さあそんな中、アル・サリームはどんな動きを？そして、サディキの運命は？

<拷問シーンの迫力は？その突破口は？>

この映画のラスト近くにはアル・サリームに捕まったフェリスの拷問シーンが登場するが、これはかなり迫力がある。したがってこれは『タイタニック』（97年）で急速に増えた華麗なレオ様ファンはあまり観たくないシーンだろう。またレオナルド・ディカプリオ自身も「拷問のシーンはさすがにストレスが強くて、終わってから3日ぐらい病気になるっちゃったけど」と語っているほど。現実にテレビニュースで流れるアルカイダの捕虜になった米兵の処刑シーンを観ても、いったん捕まったらアメリカが「一切の交渉に応じない」という基本方針を変更しない限り、生き延びる見込みは2万%ないのは当然。

ストーリー的には、なぜフェリスがアル・サリームの捕虜になったのかに注目して欲しいが、拷問シーンの迫力としては、アル・サリーム自身がかなづちを持ってフェリスの手の指を打ち砕くシーンに注目。もちろん、レオナルド・ディカプリオはバカでかい声で悲鳴を上げ舌間の表情を見せたが、そりゃ当然。しかも、それは1度ならず2度までも。サリームはもういいだろうとばかりにその場を去り、後は部下たちがレオ様の服を脱がせベッドの上に上向きに縛りつけて、さらに次なる拷問を・・・。さあ、そんな絶望的な状況の中、一体どんな突破口が？

それはここでは口が裂けても言えないし、絶対文章にすることはできないので、あなた自身の目で。ただここで書けることは、巨額の費用を使い世界最高の設備で遠隔性の男からの視線が注がれていても、それは絶対ではないということ。万策つきたホフマンはゴメンと謝ったが、それでは現地職員はたまったものではない。他方、そこで意外な効果を発揮したのが、ヨルダン総合情報総局の責任者であるハニのやり方。つまり、ハニはフェリスとの信頼関係の下で動き始めた時、オラームというアル・サリーム派の男に母親の面倒をみてやるという形で恩を売ることによって、オラームを逆スパイに仕立てあげて、アル・サリーム組織の中へ送り込み、彼からいつかその恩に報いる情報が提供されることを期待していたわけだ。さて、そんなエサまきが効果を生むことがあるの？この映画の複雑なストーリーを理解するには、そんな注意深い観察眼が必要だ。